

## 中国と旧英領西アフリカ：文化の軋轢とそれを乗り越えるための支援策

尹 曼琳

人間社会環境研究科 博士後期課程 2年

## 1. 調査背景と目的

近年、アフリカで中国の存在感が高まっており、中国の対アフリカ直接投資額と貿易額も増加しつつある。『2010年度中国対外直接投資統計公報』によると、中国の対アフリカ直接投資フロー額（非金融分野）は2003年の0.75億ドルから2006年には5.20億ドルに急増しており、その伸びは約600%にもなる。2007年から中国の対外直接投資データは金融分野を含んだ形で発表されているが、これについても、2007年から2010年の4年間で、15.74億ドルから21.1億ドルに増えている。中国の対アフリカ直接投資ストックでも、図1にみるように、2003年にはわずか4.9億ドルであった値が2010年には130.4億ドルに達している。同様に、中国の対アフリカ輸出・輸入総額も図1に見るように急増している。1950年時点の中国の対アフリカ輸出・輸入総額は1200万ドルにすぎなかったが、1987年の時点で10億ドルに達しており、2000年には100億ドルを超え、その後も増え続け、2008年には、

1068億ドル<sup>1)</sup>を記録している。2008年に発生した国際金融危機の影響を受けて、2009年の値は2008年より約15%減少したが、その後、急速に増加基調に戻っており、2010年には1270億ドルに達している<sup>2)</sup>。とりわけ21世紀に入って以降の急増ぶりには驚かされる。他方、郭（2010）によると、2001年時点でアフリカ在住中国人は約13万人にすぎなかった。これに対して、2009年7月18日、米紙ニューヨークタイムズは「アフリカで影響力を拡大し続ける中国」と題した記事で、アフリカに在住している中国人はおよそ75万人に達すると報じている。

このような、中国の対アフリカ直接投資と輸出・輸入総額および、アフリカに在住している中国人急増の背景には、中国政府が2001年から始めた「走出去」（海外に進出）戦略による影響があると考えられる。走出去という言葉が中国で最初に登場したのは1997年12月24日に北京で開かれた「全国外資工作会議」における江沢民講話とされ、その場で江沢民は海外資本の導入だけでなく、国内の有力企業は海外に積極的に出て行くべきであると主張したという（王、2005）。これを受けて、1997年から対外貿易経済合作部（現商務部）が毎年開催している「中国国際投資貿易商談会」では、第5回商談会が開催された2001年以降、「引進來（外資の導入）」に加えて、「走出去（海外進出）」の促進もテーマに加わった（中井、2007）。このような中国政府の政策の後押しが中国企業の海外進出に拍車をかけたことは疑いない。

しかし、近年、中国とアフリカ諸国間の軋轢の発生も顕著である。新川（2006）は、ウガンダでの中国投資について、中国企業は衣服、靴、バック、ベッドシート、乾電池などといった「品質」よりも「価格」が優先される製品を製造しており、ウガンダ国内でも「大量生産」により低価格製品を実現しているが、ウガンダの首都カンパラのカンパラ商工会（Kampala City Traders Association: KACITA）が、「地場産業は中国

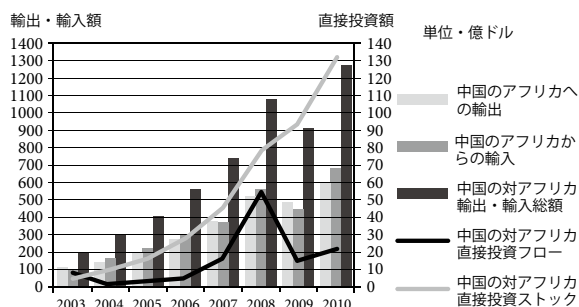


図1 中国の対アフリカ直接投資と輸出・輸入額（2003年～2010年）

出典：『2010年度中国対外直接投資統計公報』と『中国統計年鑑』各年度のデータより筆者作成。

注：直接投資フローとストックデータについては、2003～06年期間については非金融分野のみ、2007～10年期間については金融分野も含めた合計額である。

製品に市場を奪われた」と認識するなど、中国製品の氾濫に警戒感を強めていることを指摘している。渡辺(2006)は、コートジボワールに進出する中国企業のうち一部の製造業は国内企業と同じように密輸品との競争に悩まされていること、中国の企業や中国人社員が現地の環境にうまく適応できず、労使問題、現地人との対立、中国人コミュニティ内における利権絡みのトラブル、犯罪や事件に巻き込まれるケースなどが表面化しており、中国人経営者の現地社会に対する無理解や意識の低さを指摘している。また、吉田(2010)は、Marios Obwona et al.(2007)の研究を引用しながら、ウガンダのカンパラ商工会が、中国人商人は安くて質の悪い商品をウガンダ市場に持ち込むこと、中国政府が職能のあるなしにかかわらず、労働者を流入させることで、ウガンダ人の就職機会を奪っているという問題の発生についての指摘を紹介している。

以上より、アフリカに進出した中国企業の問題点として、中国企業や中国人社員が現地の環境にうまく適応できず、労使問題、異なる文化背景をもつ現地社員の不適切な管理、中国人経営者の現地社会に対する無理解や意識の低さなどが挙げられている。また、こうした中国とアフリカ諸国間の軋轢は直接投資と貿易面のみならず、文化の差異からも発生していることも否定できない。

しかし、他方で、中国政府はアフリカ諸国に対する援助を通じて、こうした軋轢を乗り越える努力も行っている。一例として、ガーナ共和国で中国の援助で建設された国家大劇場建設を紹介したい。この大劇場には、Abibigromma という名の伝統的なアフリカンダンスやドラマーを育成する団体が附設されており、アフリカ文化資源を保存する機能を果たしていると思われる。また、ナイジェリアにある投資開発貿易促進センターは、両国政府の経済・文化協力の要としての役割を果たしている。報告者が本調査を計画した2010年時点の段階で、フィールドワークの手法を用いながら、中国文化とアフリカ文化の軋轢に焦点をあてた研究はあまり見られなかった。そこで、本研究では中国政府のアフリカ文化資源保存活動に注目し、西アフリカの旧英領、ガーナとナイジェリアに赴き、中国企業労働者を含むさまざまなステークホルダーにインタビューを行った。中国政府がどのように中国文化とアフリカ文化の軋轢をコントロールし、それを乗り越えるためにどのような支援策をとっているのか、その実態と諸問題を明らかにすることが本研究の目的であ

る。なお、紙幅の関係と、別稿で調査内容を発表予定であることから、本報告では、そのうち、ガーナの調査で得た内容の一部紹介と筆者が初めて行ったフィールドリサーチの感想と今後の抱負をまとめた。

## 2. 派遣日程・訪問先

2012年

- 1.20 金 移動 金沢—大阪—ドバイ。
- 1.21 土 移動 ドバイ—アクラ。
- 1.22 日 ガーナ国家大劇場に行き、中国・アフリカ文化の融合及び中国政府の支援策について調査。工事中でした。
- 1.23 月 JICA・ガーナ事務所を訪問、市街散策。
- 1.24 火 ガーナ財務・経済計画省 (opposite ministry of Finance & Economic planning) を訪問、中国・ガーナ間の1981年から1997年までの輸出入データを入手。
- 1.25 水 首都アクラから東へ18キロのテーマにて中国人コミュニティについて調査。
- 1.26 木 ガーナ国家大劇場にて、中国・アフリカ文化の融合及び中国政府の支援策について調査。
- 1.27 金 中国華山国際集団のアクラ事務所訪問、工事現場回り、中国とアフリカの文化差異についてマネージャーにインタビューした。
- 1.28 土—29 日 ガーナ人宅訪問。
- 1.30 月 — 31 火 GIPC (Ghana Investment Promotion Center) 訪問、中国の対ガーナ投資データを入手。
- 2.1 水 ガーナ財務・経済計画省にて、中国の対ガーナ支援策について中日韓部局担当者にインタビューを実施。
- 2.2 木 中国とアフリカの文化軋轢調査のため、華院建築(ガーナ) 集団有限公司を訪問。
- 2.3 金—2.5 日 アクラにいる中国人コミュニティについて現地の中国人にインタビュー。
- 2.6 月 移動 アクラ(ガーナ)—ラゴス(ナイジェリア)。
- 2.7 火—2.9 木 中国とアフリカ文化の軋轢と融合について天獅集団の支社である富萊恩のラゴス事務所を訪問。
- 2.10 金—2.11 土 資料整理。
- 2.12 日 市街散策。
- 2.13 月—2.15 水 中国山東省鴻瑞集団の支社 Honey Rain Health Well, Nigeria, Ltd のラゴス事務所を

訪問。

- 2.16 木—2.19 日 ナイジェリアにいる中国人コミュニティについて、現地の中国人にインタビュー。
- 2.20 月—2.21 火 中国会社 Longreen Trading Co, Ltd に行き、中国とアフリカ文化の軋轢と融合についてインタビュー。
- 2.22 水—2.23 木 中国とアフリカ文化の軋轢を越えるための中国政府の支援策調査のために、中国（ナイジェリア）投資貿易開発促進センター訪問。
- 2.24 金 資料整理。
- 2.25 土 移動 ラゴス—ドバイ。
- 2.26 日 移動 ドバイ—大阪—金沢。

### 3. ガーナ共和国の概要

ガーナ共和国（以下、ガーナ）は図2に見るように、西アフリカに属する共和制の国である。図3に示すガーナの首都アクラから西へ車で1時間ほど行くと、イギリス植民地時代の中心都市ケープコーストがある。ケープコーストは、そこから車で30分ほどのエルミナ城とともにギニア湾沿岸に面し、黄金、象牙の取引地であった。エルミナ城は15世紀にポルトガルによって建設され、当初は金、象牙、香料などアフリカの品物とヨーロッパの繊維、陶器等との交換貿易が行われていたが、16世紀に入ると悲惨な奴隷貿易を行うための館に変貌した。城はポルトガルがつくり、陸地部の街並みはオランダによって建設され、オランダが建てた教会も現存している。

1957年にガーナはイギリスから独立したが、サブ



図2 アフリカ大陸にあるガーナの地理位置

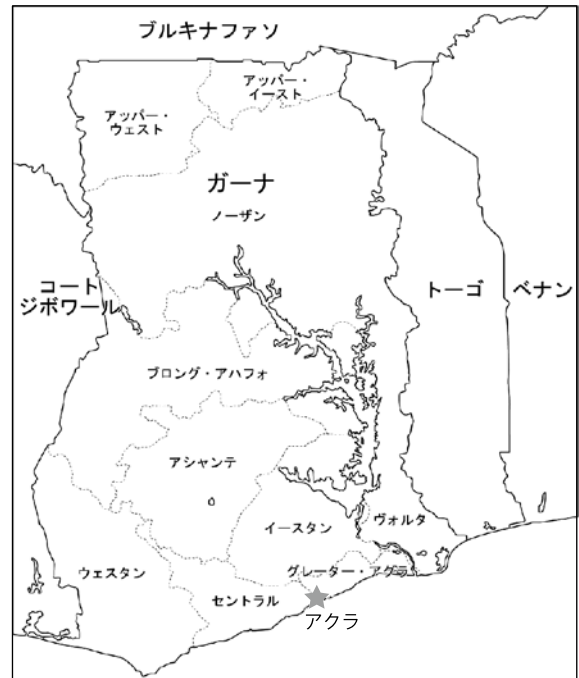


図3 ガーナの地図

サハラ以南のアフリカ諸国で最初に独立した国である。ガーナの面積は23万8547平方メートルであり、日本の約3分の2であるのに対して、人口は2011年の時点で約2439万人（世界銀行のデータ参照）にすぎない。主な宗教としては、キリスト教、イスラム教および伝統宗教が挙げられ、そのうち、キリスト教が50%以上を占めている。ガーナの海岸部から中央部にかけては熱帯雨林気候（年間降水量1500mm以上）になり、北部の大部分は熱帯サバンナ気候（同1500mm以下）に大別される。首都アクラのある南部では5—7月が大雨季、8月が小雨季、9—11月が少雨季、12—4月が大乾季である。北部では、4—10月が雨季となる。平均気温は年間を通して25—35度であるが、南部の平均気温やや低く、25—30度となる。

### 4. 中国の対ガーナ援助

中国とガーナの縁はバンドン会議が開催された1955年に始まる。当時、まだ独立を果たしていなかったガーナはゴールドコーストの名前でバンドン会議に参加した。中国と正式な外交関係を結んだのは1960年7月である。表1では、参考までに、2012年現在、中国と外交関係を樹立しているアフリカ50カ国と、国交を結んだ年月日をまとめている。表1を見ると、ガーナは中国がサブサハラ以南アフリカではギニアに

続いて2番目に外交関係を結んだ国になる。これにより、歴史的にみても、ガーナと中国の深い関係が読み取れる。中国の対アフリカ援助は1956年の対エジプト援助から始まった。それ以降、アルジェリア、ギニア、チュニジア、モロッコ、マリ、ガーナ、ソマリアといった国・地域に援助を行っている。1964年1月に周恩来首相がガーナ訪問中に記者団からの質問に答えるという形で発表した「中国対外援助八つの原則」にともない、1970年時点で中国から援助を受けているアフリカ諸国は17カ国に及んだ。

1960年の外交関係樹立とともに、中国のガーナへの援助も正式に始まった。1960年から1966年まで、中国の対ガーナ援助事業形態はフルセット事業と技術協力事業の2つに絞られた。具体的には、フルセット事業として綿紡績工場、鉛筆工場、綿花農場、水稻農場、キャッサバのでん粉工場、綿編み織工場、荒縄の工場、

ホーロー工場と綿紡織染色工場などが挙げられる。技術協力事業については、淡水魚の養殖、農作物の種の提供、野菜栽培などが行われている<sup>3)</sup>。しかし、1966年2月にクーデターによって誕生した軍事政権となる国民解放評議会（National Liberation Council、略称NLC）は、共産主義諸国との外交関係を見直したため、1966年10月20日にガーナは中国と断交した。その際に、中国のガーナへの援助も一時的に停止した。その後、1972年2月28日に外交関係が復活したことがきっかけで援助も再開された。

1972年から、中国の対ガーナ援助事業形態はフルセット事業と技術協力事業の2つからフィージビリティ・スタディ事業、ワンセット設備の提供事業、人材育成事業へと拡大された。このうち、先述の国家大劇場はフルセット事業と技術協力事業で支援が行われた<sup>4)</sup>。

先に見たように、ガーナ国家大劇場は、一部、アフリカ文化資源を保存する機能を果たしている。ガーナ国家大劇場は、1985年9月、当時のガーナ共和国元首ローリングス氏が中国を訪問した際に、中国の有償援助で建設されることが決定した。しかし、その後、中国政府がローンを全額免除したため、実際は、無償支援で建設されたことになる。

ガーナ国家大劇場の建設は杭州市建築設計院が設計し、広州国際経済技術合作会社が、CCTVに属する中国广播电视国際経済技術合作会社と共に工事を請け負った。建設面積は11896平方メートルである。この国家大劇場は1990年6月19日に施工し、2年後の1992年12月20日に完成し、2005年には修理が施されている。図4にみるように、国家大劇場は遠くから見ると、巨大な船あるいはその翼を広げたカモメのような形に見える。中はメインホール、オープン劇場、ダンスホール、中国式の庭園、レストラン、展覧ホーム、

表1 中国と外交関係を樹立しているアフリカの50カ国

| 国名     | 外交関係を樹立した日 | 国名       | 外交関係を樹立した日 |
|--------|------------|----------|------------|
| エジプト   | 1956.5.30  | セネガル     | 1971.12.7  |
| モロッコ   | 1958.11.1  | モーリシャス   | 1972.4.15  |
| アルジェリア | 1958.12.20 | トーゴ      | 1972.9.19  |
| スーダン   | 1959.2.4   | マダガスカル   | 1972.11.6  |
| ギニア    | 1959.10.4  | チャド      | 1972.11.28 |
| ガーナ    | 1960.7.5   | ギニアビサウ   | 1974.3.15  |
| マリ     | 1960.10.25 | ガボン      | 1974.4.20  |
| ソマリア   | 1960.12.14 | ニジェール    | 1974.7.20  |
| コンゴ(民) | 1961.2.20  | ボツワナ     | 1975.1.6   |
| ウガンダ   | 1962.10.18 | モザンビーク   | 1975.6.25  |
| ケニア    | 1963.12.14 | コモロ      | 1975.11.13 |
| ブルンジ   | 1963.12.21 | カーボベルデ   | 1976.4.25  |
| チュニジア  | 1964.1.10  | セーシェル    | 1976.6.30  |
| コンゴ    | 1964.2.22  | リベリア     | 1977.2.17  |
| タンザニア  | 1964.4.26  | リビア      | 1978.8.9   |
| 中央アフリカ | 1964.9.29  | ジブチ      | 1979.1.8   |
| ザンビア   | 1964.10.29 | ジンバブエ    | 1980.4.18  |
| ベナン    | 1964.11.12 | アンゴラ     | 1983.1.12  |
| モーリタニア | 1965.7.19  | コートジボワール | 1983.3.2   |
| 赤道ギニア  | 1970.10.15 | レソト      | 1983.4.30  |
| エチオピア  | 1970.11.24 | ナミビア     | 1990.3.22  |
| ナイジェリア | 1971.2.10  | エリトリア    | 1993.5.24  |
| カメルーン  | 1971.3.26  | 南アフリカ共和国 | 1998.1.1   |
| シエラレオネ | 1971.7.29  | マラウイ     | 2007.12.28 |
| ルワンダ   | 1971.11.12 | 南スーダン    | 2011.7.9   |

出典：中華人民共和国外交部のホームページ、<http://www.fmprc.gov.cn>、2012年5月26日アクセス。



図4 ガーナ国家大劇場の外見（筆者撮影）

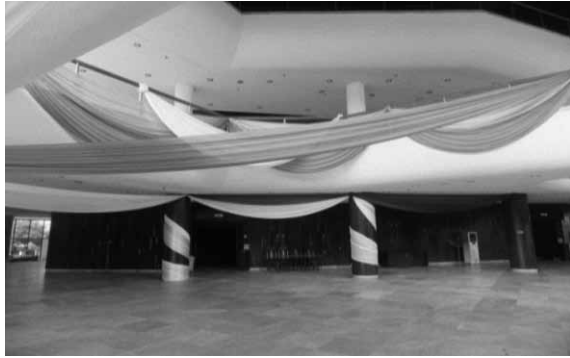


図5 ガーナ国家大劇場のロビー（筆者撮影）



図6 ガーナ国家大劇場のメインホール（筆者撮影）

バーが含まれ、三層で1492席あるメインホールでは、日夜、音楽コンサート、表彰会、会議、年次総会、演劇、ダンスパフォーマンスなどが行われている。

図5と図6それぞれはガーナ国家大劇場のロビーとメインホールを示している。ガーナ国家大劇場の目標はガーナの伝統的芸能の開発を通じて、ガーナ共和国の文化開発を促進することである。このガーナ大劇場がハードとすれば、ソフトとなる国家交響楽団、国家舞踊団、国家劇団アビビグロマ (Abibigromma) の3つがこの大劇場を利用して活動を行っている。実際、先のアビビグロマは、アカン語でアフリカを意味する Abibiman とプレーヤーを意味する Agromma の2つの言葉を融合させたもので、「アフリカの劇場」を意味する。アビビグロマの音楽、演劇およびダンスの演目の内容は、ガーナの文学、歴史、民間伝説、伝統文化がベースとなっている。アビビグロマの使命はガーナおよびアフリカの芸能を研究・促進することである。これにより、中国政府の支援で建設されたガーナ国家大劇場が、アビビグロマという伝統的なアフリカンダンスを育成するなど、アフリカ文化資源を保存する機能を果たしていることが理解できる。

## 5. まとめにかえて

今回の調査は私にとっては初めてのアフリカへの渡航であった。アフリカどころか日本以外の外国も訪問したことがなかった。また、英語も完璧とはいえないため、不安でいっぱいだった。事前調査資料の準備、調査先との連絡、日程の計画・確認、黄熱病・A型肝炎の予防接種、ビザ発給のために東京に行き、指導教員が書いてくれたA4用紙3ページの注意事項の確認をして、心の準備ができた。とはいっても、未知な土地の訪問は楽しみでもあった。現地で新しい友達ができ、調査も順調に展開した。日本と違う外国を自分の目で見て、世界が広がっている感じがした。こうした経験は論文を作成する際には非常に重要だと思う。また、どこに行っても、人間関係が非常に重要であり、特に未知な場所でどのように人間関係を開拓・維持するかの能力がフィールド・マネジャー養成の際にもっとも重要であることを感じた。私の面倒を見てくれるさまざまな人々のおかげで、今回のフィールドワークを実施することができ、私にとっては非常に有益な経験となった。

ここで、中国とアフリカの間の文化の違いおよび現地で自分で感じたことをいくつかを挙げたい。1つ目は、宗教をめぐる文化転轍が中国人とアフリカ人の間にあることである。多くのアフリカ人は宗教を信じており、例えばキリスト教徒であれば、日曜日に教会に行くことは重要である。他方、ほとんどの中国人は宗教を信仰しておらず、お金を稼ぐためには休暇を取らずに働くという考え方なので、こうしたことが、中国人とアフリカ人の間の文化転轍に繋がっているように感じた。こうした苦情は中国建設会社を訪問した時によく聞かれた。解決策としては、中国人がアフリカ人の習慣を理解するしかないと思う。

2つ目に、中国のアフリカでの存在感の大きさを感じた。特に、ガーナ滞在中、ラジオニュースでもしばしばチャイナという単語が流れていた。例えば、中国政府がガーナへ30億ドルの優遇借款を行うことが議論されていた。また、市場で、中国製スリッパ・服・かつらなどを売っているガーナ人もよく見られた。工事現場では、中国の建設会社が作業を行っていた。

3つ目は、アフリカ諸国で汚職・腐敗などがまだ存在することである。ガーナに入国した際には飛行機で知り合ったガーナ人が一緒に税関や入国審査を通っ

てくれたので、荷物チェック、賄賂の要求は特になかったが、他の中国人や外国人の多くは税関で荷物をチェックされたり、賄賂の要求をされていた。筆者自身も、ガーナの首都アクラから出国した時とナイジェリアのラゴスから日本へ戻った際に賄賂を要求された。ナイジェリアの汚職問題については覚悟をしていたが、「アフリカの模範国」と評価されているガーナでもこういう問題があることに気づかされた。

4つ目は、ガーナ人のサッカーに対する情熱である。ガーナ財務・経済計画省を訪問した日の午後にガーナナショナルサッカーチームの試合があった。勤務時間中にもかかわらず、公務員たちは会議室に集まって、私も一緒に1時間30分の試合を見た。こういう行動は日本でも中国でもほぼありえないと思う。また、中国の建設会社を訪問する際に、タクシーを拾うことすら難しかった。なぜなら、その日もガーナのナショナルサッカーチームの試合があり、それが理由で、タクシーの運転手たちが街のどこかでその試合の観覧に熱中していたからである。

5つ目は、ガーナで出会った子供たちが、学校教育に対して強い欲求を持っていることである。貧しい子供たちに「夢は何ですか」と聞くと、多くが口を揃えて、「学校に行きたい」と答えた。また、ビーチで会った子供たちは私の友達に「今度オイスターを捕まえたら連絡するよ、その代わりに英語のテキストを買ってください」と話かけた。彼はペンと紙を持っていなかったため、石で木板に友達の電話番号を記録していた。胸が熱くなった。

今後、中国人とアフリカ人が良い関係を形成するためには、中国人のアフリカ文化への理解、アフリカ人の中国文化への理解が必要である。実際、本フィールドリサーチを行っている際に、中国政府が、アフリカで孔子学院の建設と孔子学院の活動展開に積極的であることを知った。無形文化資源としての中国語と中国の伝統文化の伝達を通じて、アフリカの人たちに中国への理解を深めることを主旨とする孔子学院の設立は、中国とアフリカの間にはびこる文化軋轢を乗り越え、その融合を実現するという役割の一端を担うことが期待される。今後、中国政府が、どのように無形文化資源である中国語および中国の伝統文化を西アフリカに伝播させようとしているのかについて調査したい。

#### 註

- 1) 中国商務部のホームページ、<http://www.mofcom.gov.cn>。
- 2) 中国統計年鑑のデータより計算。
- 3) 在ガーナ中国大使館経済商務部のホームページ、<http://gh.mofcom.gov.cn/index.shtml>、2012年1月25日アクセス。
- 4) 在ガーナ中国大使館経済商務部のホームページ、<http://gh.mofcom.gov.cn/index.shtml>、2012年1月25日アクセス。

#### 参考文献

##### <英語>

Marios Obwona, Madina Guloba, Winnie Nabiddo and Nicholas Kilimani (2007) *China-Africa Economic Relations: The Case of Uganda*, Economic Policy Research Center.

##### <中国語>

王玉梁 (2005) 『中国：走出去』中国財政経済出版社、3頁。

##### <日本語>

郭四志 (2010) 『『華人酋長』まで動員—中国流がアフリカ席卷—』『週刊東洋経済』東洋経済新報社、80—83頁。

新川俊一 (2006) 「アジア企業と南アフリカ企業の対ケニア・ビジネス」平野克己編『企業が変わるアフリカ—南アフリカ企業と中国企業のアフリカ展開の報告書』アジア経済研究所、171頁。

中井邦尚 (2007) 「中国の貿易・対外投資政策」天野論文、大木博己編『中国企業の国際化戦略—「走出去」政策と主要7社の新興市場開拓』ジェトロ、37頁。

吉田栄一 (2010) 「アフリカにおける中国の経済的進出」財団法人平和安全保障研究所『中国のアフリカにおけるプレゼンス』第3章。

渡辺久美子 (2006) 「中国とコートジボワール」平野克己編『企業が変わるアフリカ—南アフリカ企業と中国企業のアフリカ展開の報告書』アジア経済研究所。